

有機酸を添加した飼料モミ米の嗜好性試験を開始

—地域を支援するため飼料米の生産技術を開発—

当センターでは、飼料米の貯蔵コストの低減を図るため、収穫したモミ米を乾燥工程を経ずに長期間貯蔵する技術を開発しています。

長期間貯蔵するために有機酸を添加したモミ米を採卵鶏に給与し嗜好性を調査したところ、採食量には変化がなく、有機酸添加の影響は認められませんでした。今後、飼料米の保存性等について調査し、技術確立を図ります。



モミ米に有機酸を添加しても嗜好性が低下しないことを確認

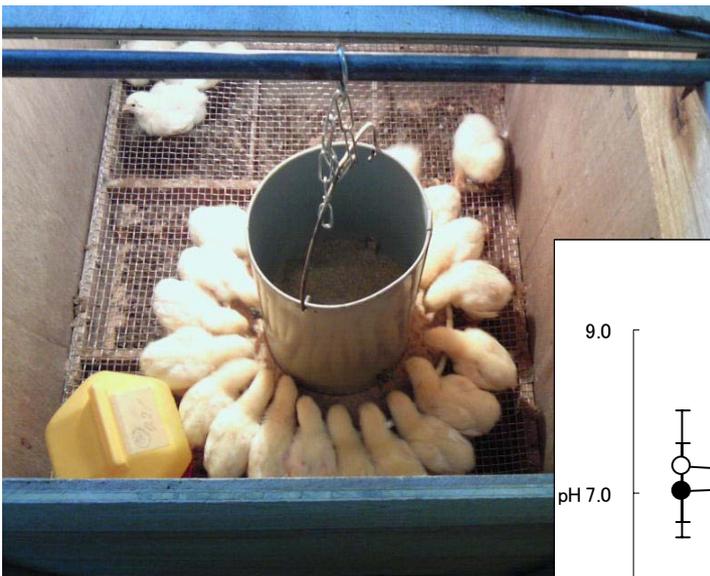
鶏へのカンピロバクター定着を抑制する機能性飼料の開発

—鶏の飼育農場で食中毒を防ぐ技術開発にメド—

カンピロバクター食中毒は増加傾向にあり、公衆衛生上大きな問題となっています。その原因食品の多くが鶏肉に由来すること、食鳥処理場やカット工場での対策に限界があることから、飼育農場での対策が強く求められています。

当センターでは、カンピロバクターが鶏に定着しにくい飼料の開発に取り組み、試作飼料を鶏に給与したところ、消化管内がカンピロバクターの定着を抑制する酸性域に傾くことを確認しました。

今後は、この飼料によるカンピロバクターの定着抑制効果を検証します。



試作飼料の嗜好性良好(ブロイラー)

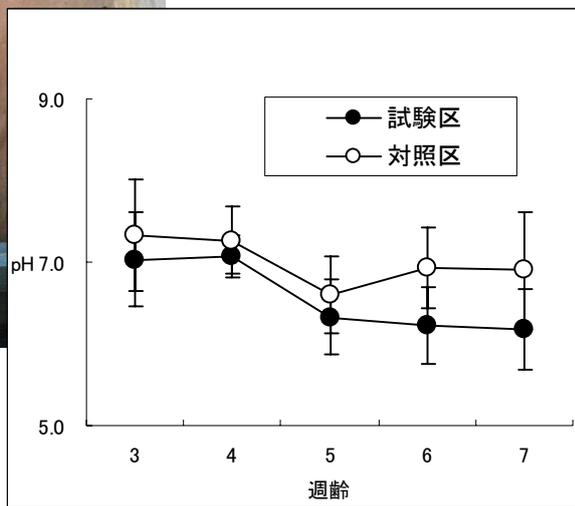


図 盲腸内容物のpHの推移

(試作飼料で病原菌の定着を抑制する酸性を維持)

種雄候補牛「玉碇218」の産肉能力検定を開始

当センターでは、雄牛として、増体や肉質を子牛に伝える能力を数値化する黒毛和種の産肉能力検定を行っています。今回、当センター（碓高原牧場）で生産し、高い能力が期待される種雄候補牛「玉碇218」の検定を開始しました。今後、18か月間にわたり増体性等の調査を行った後、肉質も調査します。



全国トップクラスの「百合茂」を父とする種雄候補牛「玉碇218」

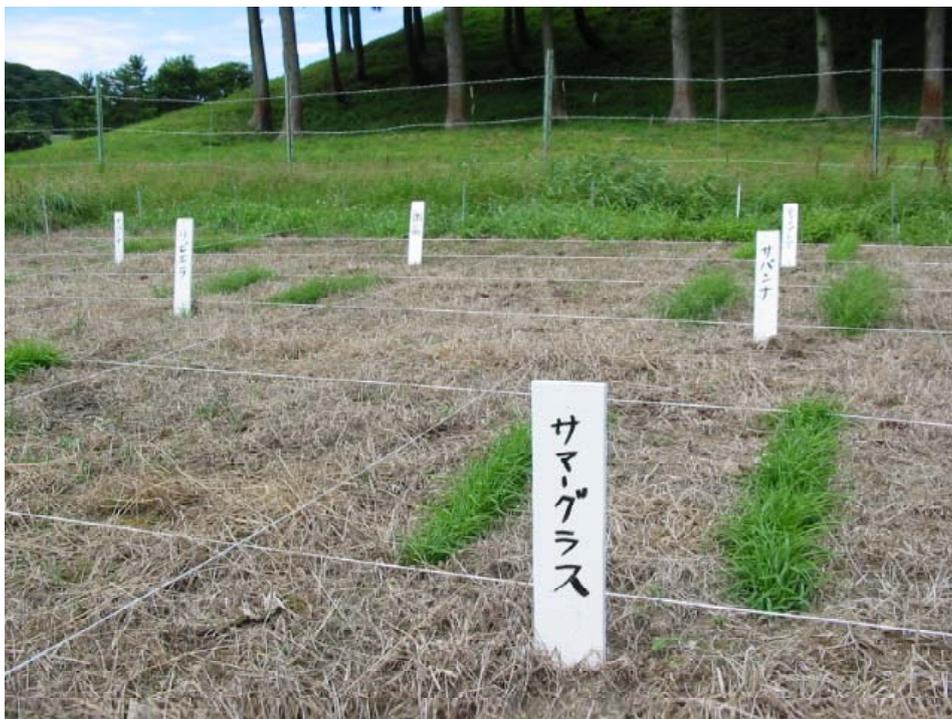


息牛を18か月間肥育し、その成績から「玉碇218」の能力を推定

播種による草地造成に適したシバ型草種を比較試験

－冬に野生獣を寄せ付けないことも条件－

冬期に地上部が枯れ猪や鹿の餌場になりやすく、苗移植より省力的な播種によるシバ型草地を造成する技術を確立するため、シバ型4品種の生育を比較調査しています。6月に播種した草種は、4品種ともノシバに比べ初期生育、発育ともに良好でした。今後は越冬性等を調査し、播種による造成に適した品種を選定します。



生育が良く有望な新しいシバ型草種

(シバのように地面を這って生育し、一度定着すると管理しやすいのがシバ型草種の特徴)

畜産センター
碓高原牧場

農家での受精卵採取業務を再開

—口蹄疫発生による農家立入自粛を解除—

当センターでは、宮崎県で口蹄疫が発生した4月20日以降、口蹄疫の侵入とまん延防止の観点から牛、豚などの飼養農家への立入を自粛してきました。

7月27日に宮崎県で口蹄疫による移動・搬出制限が全面解除されたのに伴い、農家の優秀な牛から受精卵を採取する農家採胚を再開しました。

今後も農家と地域の牛群改良の要望に応じていきます。



福知山市の和牛繁殖農家にて
28日綾部市(酪農)、30日福知山市(和牛繁殖)で再開

府内の畜産の概要や口蹄疫を学ぶ

—当センターで生活研究グループが研修会—

7月1日、府北部地域の生活研究グループ員80名が、当センターで府内の畜産概要や当センターの生産者支援の取り組み、宮崎県で発生した口蹄疫の防疫対策について学びました。

研修は、地産・地消や自給率向上に向けて自分たちに今何ができるかをテーマに開催されたもので、当センター職員の説明と質疑で地域の畜産への理解を深める場となりました。



口蹄疫の防疫に万全を期すため室内で研修

ふれあい広場の入場を再開

—のどかで牧歌的風景がよみがえる—

当場に隣接している「ふれあい広場」では、国内での口蹄疫発生に伴い、5月25日から実施していた立入制限を7月29日に解除し、入場を再開しました。

訪れた観光客は、靴底を消毒した後、ヒツジやヤギとふれあい、「可愛いね」という歓声と共に人と家畜がふれあう本来の風景がよみがえりました。



ふれあい広場の再開でトカラヤギとふれあう観光客

畜産センター
碓高原牧場

ラベンダーの花が満開

—薄紫色に彩られた牧場—

ラベンダーの花が、畑一面を見事な薄紫色で彩っています。

国内での口蹄疫発生により、ふれあい広場の立入を制限していたため、来場者は減少していましたが、満開の時期を迎えたラベンダーは、観光客の目を楽しませていました。



満開のラベンダー

畜産センター
碓高原牧場